

まつところが多いが、今後の課題としてえられたものは、

1. 定線観測の定常化
2. 渡洋観測機の使用

があげられる。

第一の定線観測の定常化は、水域分布の変化は予想外に急速で、その推移を正確に把握するためには観測飛行の間隔を充分縮める必要があること、水域を求めて不規則な航法を行うより氷の有無にかかわらず一定線上を定期的に観測するのが効果的であることが確められた体験からの要求である。理想的には毎日1回定時に定線上を飛行して水量分布図を作り、べつに標識や染料の投下で詳細な流向・流速を知れば、24時間以内の予想水量図の作成も充分可能となり、短期予報に革命的発展をもたらすことはもちろん、航行船舶には適切な指示が与えられて流水海難を絶滅することも夢ではなくなるであろう。第二に渡洋観測機の使用は、'57年使用のセスナ機は航続距離の点で、ビーチ・クラフトの場合には陸上機の性能から洋上での自機の位置撰定の点でいずれも難点があり、洋上遥か沖合までの飛行は求められなかった。

しかし延々と果てしなく広がる流水域の中は時に数百マイルに達するものがあり、その全貌を把握するには当然長時間、長距離にわたる洋上飛行が要求される。そこで観測機には洋上飛行に必要な設備をもち、必要に応じては氷質観測のための低空飛行にも耐える高性能の飛行機が必要かと思われる。

#### b. 大型砕氷船の建造

海難を誘発する要素としては水量よりはむしろ氷質にあることは前述のとおりである。ところが飛行機による氷質観測には自ら限度があり、この欠陥は直接水域内に突入して精密な氷質を調査する観測船がおぎなう以外方

法はない。また流水の移動は主として風と海流によることから氷域内の海流分布をしらずして的確な予報はありえない。そのためには氷域内を縦横に行動して氷質・海洋観測のできる砕氷型観測船が必要である。オホーツク海でみられる流水の規模からこの目的を遂行するための観測船の砕氷能力は最少限1mは必要と思われる。

#### (ロ) 乗組員への啓蒙

流水海難の続出の原因として、遭難船乗組員の流水に対する認識の乏しさが大きな要素となっていることも見逃せない。ともすれば軽視しがちな流水の実態を一般漁民に浸透させるため、一大啓蒙運動が必要かと思われる。とくに昼間の見張りを厳重に行うこと、たえず最寄りの海上保安官署や漁業無線局と連絡して流水の動向をワッチし、無理な操業を避けることを習慣づければ遭難は激減するだろう。

## 5. むすび

以上流水海難の実態とこれに対する現行の対策(海水予報)および今後必要と思われる措置について説明した。多少冗長に流れたきらいがないでもないが、2年間で一瞬の内に25名の尊い人命を船体もろとも海底に失ったこの大きな犠牲を思うとき、あらゆる障害を克服しても再びこの惨事を惹起さないことが二度と帰らないこれらの人達への、残された者のせめてもの義務と思ひ取えて筆を執った次第である。幸いにも飛行機観測もようやく緒につき、救難体制もおいおい確立される途上にあるので流水海難の激減もそう速くはないものと思われる。拙ない一文であるが流水海難に対する大方の認識の一助ともなれば望外の喜びと存する次第である。

## 九州支部だより

### 九州支部研究会

日本気象学会と西部気象管区の合同研究会は10月16日9時から17時まで長崎市労働会館で開催された。

九州各地よりの出席者は約80名のほり、ついに会場が狭くなって広い会場に変更するほどであった。

西九州の大雨と突風関係の発表には熱心な討論が集中した。

なお東京から畠山理事長および気象庁の毛利圭太郎氏が出席された。また夜は同市南山手荘において懇談会を開催し、翌日午前中は遊覧バスで市内を見物した。

また長崎海洋気象台の有明海大規模締切りの模型実験を見学したものもあった。

### 気象学会九州支部

#### 昭和32年度西部気象管区合同研究会

題目	所属	発表者
1. 台風による大分県の雨量分布	大分	笠村 幸雄 竹下 睦雄
2. 宮崎県の降雨分布について	宮崎	瓜生 健治 荒 末 一好

3. 桜島火山生活の推移と火山性微動の発現特性について	鹿児島	今里 能
4. 北半球天気図による解析ならびに予報の2, 3の問題(特別講演)	気象庁	毛利 圭太郎
5. 福岡における年降水量の変動について	福岡	小島 隆義
6. 佐賀県における日降水量のReturn Period	佐賀	早田 正美
7. 台風9号, 12号の大浪について	長崎	城間 恒信
8. 台風の Rain Band について	福岡	牛島 敏光
9. 諫早の大雨について(特別講演)	長崎	大沢 綱一郎
10. 不安定線に伴う突風と雷雨	〃	〃
11. 不安定線と暖気突風の機構	福岡	山田 三郎
12. 1月26日暖気突風の海上資料による解析	長崎	木下 正時
13. 大気中の電気伝導率と自然放射能(特別講演)	研究所	島山 久尙
14. 発散法による雨量予報	熊本	深谷 禎二郎
15. 降雨域の数値予報	福岡	山口 弘一
16. 散乱光線の強度の波長別天空分布(特別講演)	長崎大	長崎 佐藤 隆夫